

第3期 第13、14回講座

支援信頼関係が大事

子どもの心ケアなど議論

311 伝える／備える 次世代塾

東日本大震災の伝承と防

災の担い手育成を目的に河
北新報社などが開く通年の
震災伝承講座「311『伝
える／備える』次世代塾」

第3期の第13回と第14回講
座が15日、仙台市宮城野区
の東北福祉大仙台駅東口キ
ャンパスであった。第13回
は「子どもの未来」をテー
マに講師2人が子どもの支
援と心のケアを解説。第14
回は災害法制と地震保険の
講義をした。

第13回講座は、生活困窮
世帯への学習支援や子ども
食堂の運営などに取り組む
アスイク(仙台市)の代表
理事大橋雄介さん(39)が講
師を務めた。アスイクは震
災発生直後から、避難所の
子どもたちに勉強を教え

た。仮設住宅間の支援の格
差、震災により表面化した
不登校や貧困といった被災
地の課題を指摘した。

支援の在り方について
「与える、与えられる関係
ではなく、被災者が地域で
できる役割を一緒に考える

ことが大事だ」と強調した。
親を亡くした遺児・孤児
を支援する、あしなが育英
会グリーププログラムディ
レクターの相沢治さん(44)
は、乱暴になったり、学習
に集中できないなど、震災
で喪失体験をした子どもの
反応を挙げ、「これらは病
気や異常ではなく健全な反
応だ」と述べた。

災害、事故、病気などで
親と死別する子どもは1日
に300人上るとい
う。「先回りや誘導せずに、子
どもの言動を丸ごと受け止
めてほしい。良き支え手
であるためには、自分の心身
も大切にすべきだ」とメッ
セージを送った。

講話後、受講生52人は班
ごとに講義内容を振り返り
討論。「支援を受けている
人が個人の事情や背景を話
すまで時間がかかる。一対
一の関係作りが大事だ」学

生は大人よりも子どもに近
い。子どものことを自分で
ととして捉えやすい分、信
頼関係を築けるのではない
か」といった意見が出た。
第14回講座は東北大公共
政策大学院兼災害科学国際
研究所教授の島田明夫さん
(63)が「災害法制の課題」
と題して講話した。災害救
助法が定める現物給付の原
則や、7日間の避難生活の
想定など、被災者二スとの
ミスマッチが震災で浮き

彫りに。「避難生活の長期
化などに対応した法改正や
法律の制定が必要だ」と述
べた。
続いて日本損害保険協会
東北支部事務局長の柴田文
明さん(50)が「保険を中心
とした民間支援の仕組み」

をテーマに授業をした。地
震保険の円滑な支払いに向
けた震災後の広報活動や、
約1兆3000億円に達し
た保険金支払額を報告。「保
険金で自然災害に伴うマイ
ナスを補い、前に進んでほ
しい」と訴えた。

メモ 311「伝える／備える」次世代塾を運営する
推進協議会の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉
大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工業
大、宮城学院女子大、尚絅学院大、仙台白百合女子大、宮
城大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みち
のく創生支援機構。

主体性が重要に
子どもの支援は子どもが
主役という視点が重要で、
受け身になるのを防ぐため
支援者は子どもの力を信じ

者がいたことを知りまし
た。ボランティア活動を行
っています。被災者に寄
り添う支援をしていき
たい。(仙台市青葉区・東北大
2年・渡部滄葉さん・20歳)

寄り添い支える
支援への感謝の言葉を言
い続けるうち「自分は社会
のお荷物なのではないか」
という気持ちになった被災

課題解決へ行動
不登校やひとり親家庭な
どの問題が震災で顕在化し
た話を聞き、生活基盤が壊
れにくい社会を築くことが

大切だと考えました。今か
ら社会問題にしっかり関心
を持ち、解決に向けて行動
できるようにしたい。(岩
沼市・宮城大3年・高橋優
気さん・21歳)

受講生の声

担当の東北福祉大インターン生は次の通り(敬称略)。3年橋坂龍>2年大友唯衣、菅野里架



気さん・21歳)